

王敏 著

## 日中二〇〇〇年の不理解 異なる文化「基層」を探る

〈朝日新書・二〇〇六年一月〉

本書は、安倍首相による中国韓国歴訪など、日中関係改善の動きが見えて来たやに思われる時期に出版された。一九五四年生まれの王敏氏は「朝日新聞」などにしばしば論説を発表し、一般向けの読み物もある。

本書は「日中文化を合わせ鏡の比較法で観察し」て得られた「試論」と著者は言う。その結果として、日本文化の特質とは「動物を慈しむ文化」「裸のつきあいをする文化」「水に流す文化」「自然」を求める文化」であるとする。とりたてて目新しい観点はない。日本の文化が「情」によりかかり、理屈よりも感性を重んじ、時に「あいまい」なことは、これまでにもキップリングやカーカップ、ルース、ベネディクトや大江健三郎など多くの

論者が語ってきた。その意味で、本書は帯にある「卓越した日本論」でも、カバー見返しにある「驚きの日本文化論」でもないが、現代中国人の日本観として日中の「不理解」を理解するうえで意味がある。

著者は、中国文化の基底は儒教であり、一貫して中国人の「規矩準繩」であったと賞揚し、儒教は歴史上、焚書坑儒、五四運動、文化大革命の三回打撃を受けたが、いずれも立ち直ったとする。すると、始皇帝や文革はさておき、魯迅が『狂人日記』などで訴えた儒教批判は何だったのか。著者は儒教の特徴として大義の尊重をあげるが、大義はひとつしか存在せず、ある大義が別の大義と争うことは想定しない。だが、自らへの懐疑がないと、大義は不寛容になり暴走しかねない。また、著者は中国文化を欧米文化との親近性で語り、日本はそうではないとする。欧米との親近性の強さをア・プリオリに良しとするように読める点も気懸かりであった。そして、著者自身は「日

本人の自然融合感に到達した」りするのだが、自らの「観察が正鵠を得ているかどうかはわからない」と必ずしもそれに確信が持てないようである。

本書の叙述は全般に印象批評の域を出ていないが、その割には断定的かつ類型的に日本文化を論じている。これは著者が比較の対象とした中国や中国文化についても同様である。

なお、本書で縦横に引用された著作の示し方が異様であった。和辻哲郎『風土』（岩波書店、一九七九年）、小泉八雲『明治日本の面影』（講談社、一九九〇年）、新渡戸稲造『武士道』（岩波書店、二〇〇三年）、岡倉天心『茶の本』（岩波書店、二〇〇〇年）、九鬼周造『いき』の構造』（岩波書店、一九七九年）などには絶句である。初版年次がなければ、いつの論考か不明である。著者が所持する書物の刊行年次をあげたに過ぎないとすれば、編集者の怠慢であろう。

(三好章)